

# 『書評』大浦誠士氏『万葉集の様式と表現 伝達可能な造形としての〈心〉』

城 崎 陽 子

言語コミュニケーション手段の一つの形式として「うた」は存在する。「うた」が人の全き「こころ」を表現し得るということは幻想であるが、それでも、人はいかにして「こころ」を相手に伝えることができるか、どのようにしてその「かたち」を与えるかということに腐心をする。こうした「うた」と「こころ」と「かたち」の関係性を一つの表現システムとして捉え、論理化したのが本書である。

本書は大きく三章からなる構成をもつ。第一章は「〈景〉と〈心〉の表現構造」と題され、〈景〉から〈心〉という表現様式によって著者がいうところの「表現が生み出す〈心〉の造形」のありさまを「万葉和歌の表現と〈心〉」「万葉序歌の様式と表現」「人麻呂歌集と『正述心緒』」「万葉和歌における序詞の『喩』と『実』」「共感の様式（二）——人麻呂長歌の構造——」「共感の様式（二）——〈叙事〉〈叙景〉〈抒情〉——」の各節と補論「『つなぎことば』と文字」で説く。

第一章の中心となるのは、第三節「人麻呂歌集と『正述心緒』」の論であろう。正述心緒は、序歌の形式をもって「こころ」を「かたち」にする歌の様式である。序歌は、物象語を媒介として、その物の特徴や資質を「こころ」を表現する「かたち」としてひきだそうとする手法をもった歌を指す。人麻呂歌集に既存していた「正述心緒」という部類は、序歌を手法として、歌を「作る」という位相の中で捉えられるべきものであり、かつ、「うたうた」から「書くうた」へという、歌のあり方の変革期を渡って、「人麻呂歌集における『歌学』」の萌芽を示しているとの指摘は傾聴

すべきものであらう。これまでとは全く異なる歌への意識、言い換えれば、「何をうたうか」ではなく、「どのようにうたうか」という点において一つの意識改革が行われたと言うことであり、筆者はこれを「歌学」と呼ぶ。

第二章は、「羈旅歌の表現構造」と題し、万葉集に数多くみられる旅の歌の表現性について、「統一国家の形成の中で、展開する旅」という視点から「万葉羈旅歌の様式と表現」「地名」を歌うことを中心に、「人麻呂羈旅歌八首の周辺―羈旅表現の成立―」「人麻呂歌集略体歌の旅の歌」「赤人の羈旅歌と〈叙景〉」「遣新羅使人歌群『當所誦詠古歌』の位相」の各節と補論「『道行』表現をめぐって―歌謡と和歌の表現―」によって説く。

第二章の中心は第二節「人麻呂羈旅歌八首の周辺―羈旅表現の成立―」であらう。旅には本来的に「地名」と「家・妹」に向う二つの意識が共存するものである。しかし、この二つの意識が、「統一国家形成」という枠組みの中でおこった「旅」の質的変化からそれぞれの志向へと純化していくという著者の指摘は、歌人がなぜ旅の歌をうたうかという本質的な問題と相俟って様々な問題を解明する。第四節において説かれる山部赤人論では、赤人の叙景歌が、一見個人的な様相を呈しつつも、実は伝統的な儀礼性や讃歌性に則ったものであること、さらに、第五節の遣新羅使人歌の論では、彼らのうたう「古歌」は再生産的にうたわれる歌のあり方と、新旧を明確にしようとする編纂意識とのせめぎあいの中に形成された一群であることを論じている。これらの論は、なぜ人は「旅」の歌をうたうかという根元的な問題の上に現れる様々な現象の具体層を明らかにするものとして位置づけられよう。

第三章は「初期万葉の論」と題され、和歌史という視点から見た初期万葉歌の位相を「天智挽歌群をめぐって」「有間皇子自傷歌の表現とその質」「初期万葉の相聞歌」「初期万葉の作者異伝をめぐって」の各論によって説く。この章については、筆者自身も「現在の筆者の初期万葉観が形成される出発点となった論」というように、本書における諸問題の初発を胚胎する。「初期万葉論」として独立した内容をもつというよりも、筆者が第一章、第二章で説く歌表現

の論理と様式の問題が、この第三章の各論から立ち上がってきたことを納得させる一章であると考えた方が筆者の意図に沿うと考える。

「うた」が原初的に持つ言語手段としての機能は、『万葉集』という歌集の中で進化をとげる。「ここに」に「かたち」を与えるために「主題Ⅱなにをうたうか」にこたわつてきた万葉びとは、「うた」を「様式Ⅱどのようにうたうか」に関心をいだきはじめる。その痕跡は「うた」だけをみつめた巻、いわゆる「作者未詳歌巻」に特徴的にうかがうことができる。

万葉集における「作者未詳歌巻」は、「うた」を「つくる」という点に着目し、あまたの歌から部類に沿う「うた」を集積した巻である。この巻々の中に「何をうたうか」という視点と同時に「どのようにうたうか」という様式によって編纂された痕跡が残されていることは、そこに、「ひと」と「ここに」と「うた」と「かたち」という問題が幾層も重なっていることを示している。そして、この層のそれぞれが「享受」という過程を経て形作られ、次の層へと展開しているのだ。

幾層にも重なる「ひと」と「ここに」と「うた」と「かたち」の問題を遡源していった先に「うた」に「かたち」を与える歌人の営みが存在することはいうまでもない。著者はこの点を「柿本人麻呂」に帰着させる。本書の遡源的研究の結論であり、特徴でもある。それだけに、「うた」に「かたち」を与える営みを一歌人に集約してしまうところが、今後さらに問われていくべき点だと思う。(A5判、四一五頁、笠間書院、平成二十年六月三十日発行、定価二二、五〇〇円＋税)

(國學院大學・兼任講師)